

第四回人文知応援大会 大会宣言

2024年3月10日
人文知応援フォーラム

学問は、元来真理を極めるための知的作業としてスタートした。

しかし文明の発達に伴い、社会は、学問の一部である科学に政治・経済的目的達成のテクノロジーの提供を期待するようになり、科学は特定の現実的目的の達成手段と捉えられるようになった。

同時に起こった学問(とりわけ自然科学分野)の細分化により、社会は各分野の専門知を目前の目的達成への貢献で評価するようになり、大学教育でも一般教養の軽視、専門領域の知識習得の早期化が進んだ。

しかし、専門知は固定された視座を与えるが、それ単独では複雑さを増す現代の問題を解決することできない。多くの分野の知を統合した総合知が必要である。

ここで想起すべきは、中世ヨーロッパが、所与の実務的目的を達成する科学を「奴隷的技能」と位置付け、それに囚われずに「自由に」真理を探究して人間のあるべき姿を追い求める幅広い学問体系として「リベラルアーツ」という概念を確立したことである。

もちろん、西欧で発達したリベラルアーツと日本における「教養」は、成り立ちもコンセプトも異なる。しかし、効率性や数値主義を評価基準にすべきだとする「思い込み」により自らを拘束する流れを脱し、知的活動の本来の姿である「人間とは何か、どう生きるべきか」という問への自由な好奇心を取り戻すことは、時代の違いや、洋の東西を問わず必要である。

そのためには、社会として、特定分野の専門家であることに満足せず、隣接分野の知識や古典、芸術などに関心を持ち、それが幾重にも重なるような仕組みを構築して全体を俯瞰する知(総合知・人文知)を築いていかねばならない。それが、価値観やライフスタイルの激変により未来を見通せなくなってしまった現在を生き抜く、最良の方法である。